

患者家族にも親身

迫る2025 シフト

2

9部 訪問看護師の力

訪問看護師の仕事は、利用者本人のケアだけではなく、家族一人ひとりにも心を配り、時にはその関係改善に動く。

昨年3月末、訪問看護師の本多幸子さん(50)は、横浜市鶴見区のマンションで、神経難病を患う星晴美さん(73)のケアをしていた。終えると、大腸にポリープが見つかった夫の安観さん(74)のことが心配で、検査結果を見せてもらった。

ポリープはかなり大きい。それなのに自分一人で医師の説明を聞きに行き、



星晴美さんに話しかける夫の安観さん。訪問看護師のおかげで、娘の由紀子さん(右)や寿美子さん(左)との距離も縮まったという＝横浜市鶴見区

内視鏡手術をすることを決めていた。本当に内視鏡で

取り切れるか、本多さんは不安を感じ、安観さんこ

う語りかけた。

「ご主人、娘さんと一緒に、もう一度検査結果の説明を受けに行った方がいいと思いますよ」。結婚し、独立している2人の娘に頼るよう提案した。

晴美さんは1998年に徐々に体のコントロールがきかなくなる多系統萎縮症と診断を受けた。安観さんは会社を早期退職し、2000年から、ほぼ一人で在宅介護を続けてきた。

「娘の生活も大事にしたいんです」。渋る安観さんに、本多さんは「もっと自分の体のことも考えて。ご主人が倒れたら、晴美さんは家での生活ができなくなりますよ」と諭すように話した。

安観さんは、しばらく考えて答えた。「わかりました」。親身に心配してくれたのが、心に染み入った。

本多さんは、自身が管理者を務める鶴見区医師会第2訪問看護ステーションに戻ると、メインで担当する

重田典子さん(46)らに「ご主人心配だから、頼んだわね」と伝えた。

重田さんは訪問の際、次女の寿美子さん(46)に電話を入れた。「お父さんと一緒に病院に行つてあげて」。

寿美子さんは快諾した。約2週間後、安観さんは、寿美子さんと長女の由紀子さん(50)と一緒に病院に行き、医師の説明を受けた。3人とも内視鏡で手術する方針に納得した。

娘2人には「おかあのこととは俺がやるから、気にするな」と言い続けてきた。娘たちは車で30分ほどの距離に住むが、遠慮して実家にあまり行かなかった。

だが、大腸ポリープの件をきっかけに、特に用事がなくても実家に来るようになった。

寿美子さんはいう。「父は、以前に比べ私たちに頼るようになった。信頼をおく第三者が助言してくれたので、父にもスッと入ってきたのだと思います」